

平和への思い最期まで

県被団協 細谷さん死去

広島原爆で被爆し、県原爆被害者協議会（県被団協）設立の中心人物だった細谷勝一さん（真岡市西田井）が14日、92歳で亡くなった。老衰だった。「原爆で死んだみんなの分まで頑張らなくちゃなんねえ」。核廃絶と被爆者援護を求め、県内被爆者のけん引役として半世紀にわたり奔走し続けた。戦後71年目。戦争の記憶の風化が進む中、戦争のない平和な未来を願い、亡くなる直前、仲間思いを託していた。

（小野裕美子）

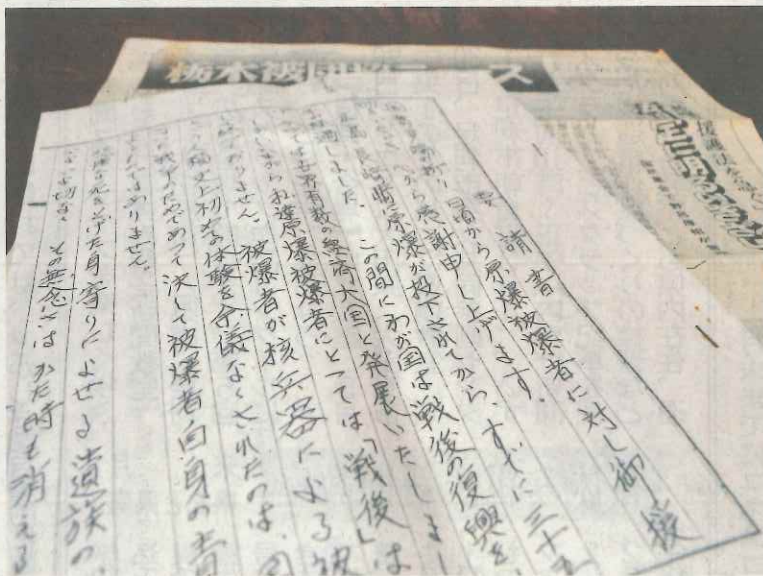


被爆体験を語る語り部としても活動を続けていた細谷勝一さん（2009年11月）

1945年8月6日。細谷さんは爆心地から約2キロの陸軍兵舎で被爆した。翌日から遺体収容や被爆者の治療に当たり、数え切れないほどの命を見送った。復員後、肝臓病で生死の境をさまよう。5人の子のうち、2人を早くに亡くした。

「被爆の影響」と感じる体調不良に苦しみ、不安を抱えていた。「同じ思いの

仲間が集まれば心強くなるはず」。本県内の被爆者を



「被爆者にとって、あの戦争は続いております」。被爆者援護法制定を求め、1980年に細谷さんが書いた国への要請書

探し、県や議員らを訪ねて協力を仰いだ。

終戦から13年後の1958年、県被団協の発足にこぎ着けた。

被爆者援護法の制定を求めて国に要請書を提出するなど精力的な活動を続け、71年からは14年間、会長を務めた。

戦後50年が過ぎたころ、次女の幸子さん（66）ら家

族に体験を話すようになった。

体が真つ黒に焼け焦げた老女が「兵隊さんよ。みんなが平和に暮らせるよう、役立ててくださいらんか」と言いつつ、わずかなお金を差し出した。

その話をする時、いつも声を詰まらせ涙を流した。語り部としての活動も長く続けた。

1カ月ほど前のことだ。県被団協会長中村明さん（85）を病院に呼んだ。もう話すことはできなくなっていた細谷さん。何を伝えたいのか、すぐに悟った中村さんは「（被団協は）心配しなくていい、大丈夫だよ」と手を握った。細谷さんはにっこりと笑みを返した。

県被団協は会員が減って

いる。託された訃報に触れ「戦を見届けてくれ止めている。

18日は告別式が遺品を整理し小中学校で講演け取り大切に保た感想文が見つ父の言葉がよ涙をめぐった。い世界になくんだ。若い人にさを知ってほし